

佐久穂町地域おこし協力隊

やまうえ まさこ

山上 雅子

活動報告書



プロフィール

1977年5月6日 兵庫県尼崎市生まれ。日本女子大学卒業。

名古屋市～川崎市～横浜市を経て、2018年8月41歳のとき、息子と2人で佐久穂町に移住。

2018年10月佐久穂町地域おこし協力隊着任。

20代でグラビアカメラマンの大御所・山岸伸氏に師事した後、フリーカメラマンに。

30代はOLとして大手のIT系企業で勤める。趣味は山登り。日本百名山は37座踏破。

協力隊として

情報発信と移住促進

地域おこし協力隊として佐久穂町に呼んで頂いたばかりの頃。私にできることは何だろうか?とこの町を見たとき、最初に思ったのは「この地域、そんなに“おこす”必要がない…」ということでした。すでにコミュニティのつながりも盛んで、町の皆さんがお元気。「こんな田舎によく来ただね」と皆さん謙遜されますが、その言葉の裏には地元への愛も感じる。この町の役に立ちたい!と意気込んでやってきた、よそ者の私がまずやるべきことは「私も仲間に入れてください」と既存のつながりの中に、ゆるやかに入っていくことでした。保育園のPTA、地区の集まりごと、地元の方が主催のお祭りなど身近なところから積極的に参加する日々でした。

協力隊として与えられた任務は「情報発信」と「移住促進」。発信にあたってこの町をさらによく知るために、保育園や小学校の他、あちこちにお邪魔して、最初の一年はとにかく「佐久穂を知る」に徹しました。そして、素直な気持ちでこの町を見て、感じたことをSNS等で発信し続けてきました。



中でも小学校給食については、都会との比較ができる私だからこそできることとして、着任前から企画を温め、3年の任期を縦軸でじっくり使って取材させていただき、一つ形に残せるものを町に捧げる思いで作りました。それが冊子「佐久穂の給食は、おいしい」です。佐久穂を知らない人にも佐久穂を知ってもらいたいし、地元の人たちが自覚していない佐久穂の魅力に地元の人にこそ気付いてほしい。限りある任期と、私の持てる全ての経験と技術を使って「佐久穂を伝える人」を精一杯務めさせていただいたと思っています。

移住促進に関しては「活用できる空き家の増加」と「移住者と地域のハブ的存在になる」を目標にして活動してきました。大日向小学校開校のタイミングと重なり、佐久穂に住みたい人の急増と住む家がない現状とで、需要と供給の不一致が加速することが見えていながらも、よそ者の私にできることに限界を感じた3年となりました。



yamania

起業 — 3年後もここで生きていくために —

「3年の任期満了後もここで生きていけるだろうか?」という問いは、着任当初から抱えていた課題であり、任期中にこの佐久穂町で安定的に生きていく見通しを立てている必要がありました。「3年はあっという間に過ぎるだろう。年齢的にもやり直しは効かない。後がない。」振り返ると、何のツテもないこの町で生きていくための助走期間として、この3年はとてもありがたい期間でした。

私は子連れということもあり、定住志望の移住者でした。その為、序盤から自立を目指していたので、3年間を少しも無駄にしたいと思いきり着任前の2018年9月には開業届を出しました。



「yamania」

屋号は着任後の2019年1月に「ブランディング会議」というものを開き、参加者の皆さんと一緒に決めたものです。最初に住んだ大日向4区の自宅に工房を構え、茂来山などこの地域の風景をデザインした器の製造・販売の事業をスタートさせました。もちろん、それで食べていけるかという不安はありましたが、地域にも少しでも貢献すること、そして私たち親子が生きていくことを目指して。

ですが、絵付け作家として一人での事業展開には限度もあり、なかなか器一本では食べていくのは厳しいものでした。そこで、かつてカメラマンだった経験も生かせればと、写真撮影の事業との抱き合わせにして、収入を得る手数を増やしました。

「地域おこし協力隊の山上さん」ではなく、「yamaniaの山上さん」。卒業後のその先もずっとここで生きているために、一事業者として生きていけるかのチャレンジをさせてもらい、3年経った今、やっと少しずつ認知してもらえようになったというところです。本当のチャレンジはこれからなのだと思います。



台風 19 号

何もできなかった

2019年10月12日土曜日。翌日に控えた紅葉祭に、エコクラフトクラブの皆さんと一緒に出店予定でした。そのための絵付けした器を焼成しようと、朝から電気炉のスイッチを入れました。

作業机から見える抜井川は前日からの雨で茶色い濁流になっていて、朝9時の時点でなみなみとした水嵩で、宮社橋の橋脚を飲み込まんばかりに叩いていました。

2階の居室に猫2匹を残し、息子と二人茂来館に避難。一夜明け戻ったら、自宅周辺の景色の変わりようにただただ呆然とするしかありませんでした。

役場では災害警戒本部が設置されていました。支援物資のカップ麺を食べ、椅子で仮眠しながら復旧に向け奔走する職員さんたちを見つめながら、協力隊として「私も何かしなければ」と気持ちは焦るばかり。ただ被災地から自身の心理を発信をするしかできませんでした。

子連れで地方に移住した意味

横浜で暮らしていた頃、常に大地震への不安はつきまといました。私一人で、子どもと猫を抱えては逃げられない。移住の理由は複合的ですが、そんな不安から逃げるように、地方移住という選択をしたという側面もありました。移住先でのまさかの被災に「私はここで生きていけるだろうか」と急激な不安に襲われました。しかしながら、弱気になった私が受け取った実家の親からのLINEメッセージには「何事も経験です。町のお役に立ちなさい」とだけ。そうか、何も役には立てそうにないけれど、私はここで踏ん張るしかない。そう思いました。

あのとき、身寄りのない地での被災に、私たち親子を親身に心配し、助けの手を差し伸べてくださった町の方々のおかげで、生活再建へ向け一歩一歩進むことができました。私たち親子が、感謝を忘れた日はありません。

これからも、ここに

豊かで穏やかな自然環境を思い描きやってきた移住者の私に、台風19号は強烈なインパクトとメッセージを与えました。

まるで、自然と共に生きる覚悟を問われた気がしたのです。

「来てすぐにこんな目に遭って佐久穂が嫌になったでしょう？それでもここにいてくれるのかい？」優しい言葉をかけてくれる町の方々に、私は地域おこし協力隊とは名ばかりで助けてもらうばかり。

何もできなかった不甲斐なさもあって、これからここで、助けてもらった恩を返していける人にならなければ…という思いをより一層強くする出来事となりました。

「しらかばちゃん」

アイデンティティ

2012年に誕生した「しらかばちゃん」。そのただただ可愛いキャラクターの存在に、実は移住前から注目していました。

「佐久穂に行ったらしらかばちゃんと一緒に色んなところに行きたい。」そんな夢を、胸の内に抱えて移住したのです。

しらかばちゃんを活用させてもらうことになったきっかけは台風19号です。

あの時自分が何もできなかった反動と、災害後町を明るくする必要性を被災当事者になって痛感した体験から、「町の人を元気にする」ために生まれてきたしらかばちゃんの力を今こそ借りるときだと思ったのです。

そこで、旧八千穂庁舎の倉庫で文字通り横になっていたしらかばちゃんに、生まれてきた意味をもう一度感じてもらうべく、立ち上がってもらいました。

公共物を使つての営利も含む活動に様々なご意見を受けたこともありました。活用にあたり私が一番大事にしてきた信念は「しらかばちゃんが喜ぶかどうか」という点です。

協力隊という立場として、町の大事な財産を預らせてもらえたという前提はもちろん、個人の営利にのみ走らないよう、あくまで町のために、それでいてしらかばちゃん自身がやりがいやアイデンティティを感じられるかどうかという点を、活動のポリシー基準にしてきました。

同じ信念でボランティアで協力をし続けてきてくれている運営チームの仲間たちには感謝をしています。



今までにない拡散力

2020年2月、町の許可を得て、Twitterにしらかばちゃんの公式アカウントを開設しました。それまでも、私個人のSNSでは、佐久穂について様々な発信をしてきましたが、キャラクターの力を借りた発信力と拡散力は、想像以上でした。

台風19号のとき、佐久穂町の被災状況はタイムリーに発信しきれておらず、発信力の弱さは今後の課題になると感じました。

災害以外でも、何か発信したい事象が起きたときに、一地方自治体にも拡散効率の良いツールは今後、必ず必要になってくると思います。

そのためにも、日々内外に向けた発信の手を止めずに、ネットワークを通じた関係人口との関係性の醸成は重要です。

しらかばちゃんは、その間口を誰よりも広げる力のある随一の存在でもあり、佐久穂町の認知度向上とイメージアップに大いに貢献してくれました。



目に見える方法で

しらかばちゃんとの活動を始めてすぐ、世界はコロナ禍に陥りました。世の中全体が不安なムードに包まれる中、そんな時こそしらかばちゃんの力を発揮するときだと感じました。SNSにおける発信については、慎重になる必要がある一方、キャラクターの持つ柔らかさが人の心を和ませ、人の心を結束する力があるということを知りました。また、子どもたちにも伝わりやすいように、感染症対策をしらかばちゃんが訴えるポスターを作り、町中に配りました。

県内外の安心感につながる、自家用車のステッカーも作りました。

町の人々の目に見える形で、しらかばちゃんの力による一体感を生みだしたのです。



「しらかばちゃん」

そこにある愛を引き出す

ポスターやステッカーを作ったのは、地元の人たちのしらかばちゃんへの愛でした。以来、グッズ開発のニーズの声も沢山いただきます。

「しらかばちゃんマスク」は、地元を中心に1,300枚を超える数をお買い上げいただいています。「LINEスタンプ」は様々な世代の方にご利用いただいていると聞き、とても嬉しく感じながら、こんなにも愛されている存在を眠らせておくのはもったいないことだったと、改めて実感しています。

町外の人に、佐久穂町の存在を知ってもらうためのシンボルとして、しらかばちゃんは非常に有効なのですが、実は町民の皆さんが地元への愛に気付いたり、地元愛を育て得る象徴的存在(アイドル)でもあるのだと、行く先々で感じています。

そのアイドルを、お祭りの賑やかしのためだけの着ぐるみとして扱うのではなく、佐久穂に生きる一人の仲間として「人格」をもった存在にしたいと、今なお作り上げている途中です。しらかばちゃんのキャラクターを、これからも町の皆さんと一緒に、大切に作っていききたいと思っています。

しらかばちゃんグッズの制作にあたっては、デザイン費や原価に対して、正直なところ赤字スタートです。

しかしながら、それはしらかばちゃんと佐久穂町の新たな価値創造のために必要な初期投資と思っています。さらなる価値と利益と多くの人の喜びを、しらかばちゃんならば生んでいけると信じています。



佐久穂を守る一人になりたい

2018年当時人口約370万人の横浜市から、人口約1万1千人の佐久穂町へ移住して、一番私が変わった部分は「担い手意識」です。

「町のことは私がやらなくても誰かがやってくれるだろう」と、遠い他人事だったのが、佐久穂では「自分たちでやる」なのです。そうして作ってきた景観や繋がりや安心感の中で、この町は成り立っているのだと、この3年の間、様々な場面で学ばせていただきました。

PRという上部の活動だけでなく、これからは自分たちで町を作りそして守る側へ、その担い手の一人になりたいと、意識が変化しました。具体的には、自分の事業でのしらかばちゃんグッズ販売利益より、その一部を植林に充て、未来に残す森づくりに役立つ企画などを現在進めています。

私一人ではできないことですが、しらかばちゃん力も借りて、いつまでも住み良い佐久穂町を守る「担い手」の一人になれるようこれからも努力していきたいと思っています。



佐久穂の森を守るために
しらかばちゃんグッズ
を販売しています。

グッズをご購入いただくと、
1個につき苗木1本の植林に
つながります。

植林活動は、自然公園...
わたしの住む佐久穂町も2019年度の
自然19年度で大きな結果を受けました。

安心して暮らせる美しい佐久穂町を未来の子どもたちに
つなげたい。今わたしができることはこれです。

わたしが生まれた佐久穂町の森、
この美しい森を、守り、この未来を守りたい。

株式会社資本のみなさん

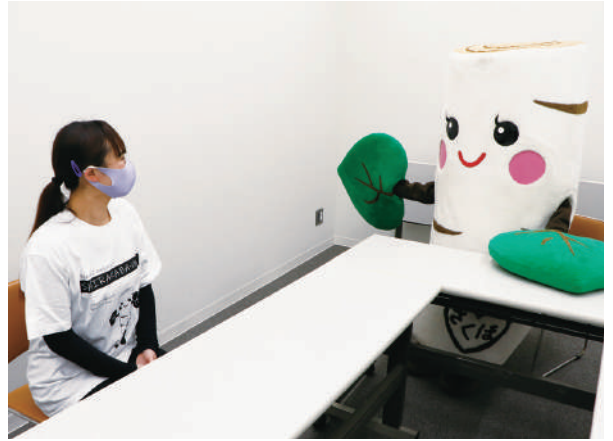
購入方法
yamania web サイト
<http://www.yamania.com>

shirakaba-chan
会社 SNS
twitter
youtube

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
このプロジェクトは、2019年に国連サステイナブル開発目標(Sustainable Development Goals)の「持続可能な消費と生産」の「15. 陸の豊かさを守る」を達成する一助となります。

しらかばちゃん対談

山上雅子が3年間で一番感謝したい相手、
佐久穂町公式キャラクターの「しらかばちゃん」と
生みのお母さん(デザイナー)に対談してもらいました。



宿命を教えてくれた、 唯一無二のプロデューサー

しらかばちゃん 2019年の台風19号でたくさんの方が不眠不休で働いている中、「今こそ、みんなを励ましたり、情報を発信するときなんじゃないかな。しらかばちゃんはそのために生まれてきたんだよ」と雅子さんが言ってくれたことで、二人三脚がはまりました。

母 倉庫で眠っていることも多くて「忘れられているのかな」と思っていたことも。でも「しらかばちゃんは、かわいいだけで十分!どんな景色でも写真映えるよ!」と言ってくれて。

グラビアアイドルを撮影する有名カメラマンの下で働いていた雅子さんは、かわいいものを究極的にかわいく撮る天才!

しらかばちゃん 天性のプロデュース力だよ。いつもその気にさせてくれる。「しらかばちゃんは約50万本に一本*の逸材!」と言ってくれたのも、うれしかったな。

※八千穂高原白樺群生地には約50万本の白樺が植生しており、しらかばちゃんはそのうちの1本である。

母 SNSを始めたことで、たくさんの方に佐久穂町を知ってもらえたね。見たことのある景色や知っているお店も、しらかばちゃんを通すと新鮮な情報に映る。

しらかばちゃん 「一人の女の子」として扱ってくれたから、町に生きる“いち女の子”として素直な思いを発信できたのかな。即興でダンスをしたり、ピアノを弾いたり、無茶ぶりもあったけど(笑)。行く先々で皆さんに笑顔になってもらえて、わたしも雅子さんと一緒にたくさん笑ったなあ。



母 もう一度命を吹き込んでくれたおかげで、しらかばちゃんを「ずっと好きだったよ」と言ってくれる方にも出会えました。母として、こんなにうれしいことはない。

しらかばちゃん かわいく、魅力的にしてもらえたわたしは幸せ者。もっといろんな人に会いにきたいな。そのとき、わたしの隣には雅子さんが居てほしいです。

3年間の協力隊としての活動を通して これからの夢

地域おこし協力隊としての日々は、悔いの残らないように、その先に繋がるようにと、がむしゃらに走った3年間でした。

着任当初、「この町は、そんなに地域をおこす必要がない」と感じたことを冒頭に記しましたが、3年間の活動を通して分かったことは、「地域をおこすのは私ではなく、地域の人々の力だ」ということです。協力隊とは「いかに地域に協力してもらうか」隊。

よそ者だからこそ感じる気づきや、これまでに培った経験も生かしながら、本当にたくさんの地元の方々に協力していただき、多くのことを自由にやらせていただくことができました。

間違いもあったと思います。ただどんな時でも、温かく見守ってくださり、寄り添い、手を差し伸べてくださった皆さんの気持ちが、いつも私の中で眠っていた何かを突き動かすエネルギーとなりました。多くの出会い、ご縁に感謝します。

色々あった私と息子ですが、おかげさまで母子ともに健やかに佐久穂での暮らしを楽しませてもらっています。今まで住んだどの場所よりも、佐久穂町が大好きだと断言できます。「息子と猫たちと幸せになりたい」そう思って佐久穂町に来た私ですが、これからの夢は、このまま佐久穂町で



子どもを育て上げ、そして穏やかに歳を取っていくことです。

3年間お世話になり、本当にありがとうございました。

そしてこれからもどうぞよろしく申し上げます。

佐久穂の皆さま
3年間ありがとうございました。
これからも頑張ります。
やまうえ ままこ
山上 雅子



〈メディア掲載情報〉

新聞：信濃毎日新聞、読売新聞、おらほよみうり
雑誌：KURA、長野 Komachi
Web：日経 ARIA
ラジオ：FM 軽井沢、FM 佐久平
テレビ：abn「駅前テレビ」ほか